

降格課長、元部下の課長に人事の紙で押さえられ、机の下で啜えさせられ面談室でナカに出される

R18

2026・10・8

目次

第1話 課長代理の夜

第2話 評定の欄

第1話 課長代理の夜

「粕谷さん。面談室。見積は置いといて」

内線は、返事を待たずに切れた。

粕谷晃嗣は受話器を戻して、打ちかけの見積を保存した。

月曜の夜、八時すぎ。

営業二課のフロアに残っているのは、粕谷と、窓際の課長席の織田笙真だけだ。

「粕谷さん、コピー機の紙詰まり、直しときました。見積を差し戻されなきゃ、定時に出てたんすけどね。お先です」

樋口航平が袖をまくったまま鞆を肩に掛け、粕谷の机の飴を一つ、断りもなく口に放りこんで出ていった。

「おう。お疲れ」

廊下で、総務の安西の声がしている。

「丸山さん、脚立どこやった。面談室の蛍光灯、明日替えるんだ。ちらついてんだよ、あそこ」

守衛の丸山が大きな声で何か答えて、ラジオの音と一緒に遠ざかった。

粕谷は立って、上着の前を留めた。

課長だった頃に詠えたスーツは、肩と胸がきつい。

——降りて二週間だ。まだ腹が立つ。

課長席から織田が出てきて、先に廊下を歩いていく。

粕谷より頭半分低く、胴の厚みは半分ほどしかない背中だ。

先月まで粕谷の後ろを歩いていた背中が、今は前にある。

面談室は二階の奥で、窓がない。

蛍光灯が一本、ちらついている。

織田は粕谷を先に入れて、後ろ手に鍵を回した。

かちゃ。

「座んなくていいよ。椅子は使わないから」

織田は内ポケットから紙を一枚出して、机に置いた。

「業務命令。読んで」

『業務上の必要により、今週は二十二時まで残業とする。作業は単独で行う。退出の際は課長へ内線で断ること』

「……見積の点検に、一週間も要らねえだろ」

「要らないね。あんたの見積、直す所がないもん。隣で見てて、一回もなかった」

織田は紙を伏せて、机に浅く腰をかけた。

そうやって座ると、織田の目は、立っている粕谷の胸のあたりに来る。

「残業の中身は、俺が決める」

じ、とファスナーの下りる音がした。

織田は自分で下着をずらして、ちんぽを出した。

もう硬い。

長くて、上に反って、亀頭の張りが大きい。

「握手、得意だろ。あんたの手で客が黙るの、隣でずっと見てた」

「……織田課長。その紙の『作業』ってのは、これのことか」

「そう。紙は人事に見せるほう。こっちは、俺とあんたのほう」

冗談を言う顔ではなかった。

粕谷は右の拳を握って、ひらいた。

殴れば、明日から客の前に立てなくなる。

——手を汚すほうが、まだましだ。

「洗ってあるんだろうな」

「昼に小便を一回。確かめる？ 鼻で」

「鼻が曲がる」

粕谷は一步出て、右手を伸ばした。

握った。

指を回しても、亀頭が掌の上へはみ出す。

硬くて、掌の中でどく、どくと脈を打っている。

「……っ、は。でかい手。皮、厚いな。何でこうなるの」

「鞆だ。新人の頃から提げてりゃ、誰でもこうなる」

「ざらざらする。……いいよ、それ。そのまま上まで」

粕谷は付け根から亀頭のくびれまで、掌を一度だけ滑らせた。

乾いた皮が引きつれて、織田が腰を引いた。

「痛い痛い。乾いてんだよ。唾」

「は？」

「唾。あんたの。掌に吐いて」

織田は顎で、粕谷の右手を指した。

「……明日、客に出す手だぞ、これは」

「早く。乾いたまま擦られたら、俺の皮がむける」

粕谷は自分の右の掌に、唾を落とした。

ぺっ。

粕谷は自分の唾を、自分の掌で、織田のちんぽに塗りつけた。

ぬる、と今度は滑った。

「そう。……ふ、ッ。強い強い、潰す気か。
指が太いんだからさ、輪っかにしないでいい。掌で包んで」

「注文が多いな」

「言うよ。もっと上。亀頭の下、親指で。爪は立てるなよ。腹のところで、くるくる」

粕谷は言われた所へ親指の腹を当てた。

くちゅ。

くちゅ、くちゅ。

唾と、亀頭の割れ目から出てきた我慢汁が混ざって、手の中で音が立つ。

見ていられなくて、粕谷は顔を壁へ向けた。

「顔。こっち」

織田の右手が粕谷の顎を掴んで、正面へ戻した。

夕方の青いひげが、織田の指の腹でじょり、と鳴った。

「人の顔を見ながら扱く趣味はねえ」

「目をつぶってても出来てるよ。上手いもん、あんた。自分のをやり慣れてる手だ」

「……ッ、汁を拭け。俺の親指に、垂れてる」

織田の亀頭の割れ目から、我慢汁が玉になって、粕谷の親指へ垂れた。

「やだね。それで滑ってるんだろ。それに喋ってないと、すぐ出そうなんだ。あんたの手、ざらざらして、ぬるぬるで、ずるいよ」

「そっちも、垂らしてるじゃねえか。机に落ちるぞ」

「待ってた手だぞ。こぼれもするよ」

粕谷の手が、一拍だけ遅れた。

「……上着の前、開けて。腹が隠れてて、つまんない」

「注文の次は、服か」

「ボタンだけ。脱げとは言っていない」

粕谷は左手で、上着のボタンを外した。

前がひらくと、きついシャツが胸に貼りついているのが丸見えになる。

「胸、厚いな。ボタンが泣いてる。……いいよ、手、続けて」

織田は顎から手を放して、机の縁に両手をついた。

ことん、と床で音がした。

織田が右の革靴を、踵から蹴って脱いだ音だ。

靴下の足が上がってきて、足の裏が、粕谷のスラックスの前にぺたりと当たった。

「……靴を脱ぐな。客先の座敷でも渋る男が」

「暇なんだよ、こっちの足。あんたは手、止めんな。俺のを忘れんなよ」

土踏まずが、スラックスの上からゆっくり上下に動いた。

粕谷のちんぽは下着の中で、皮を半分かぶったまま、左の腿に寝ている。

その形を、足の裏が布ごとなぞっていく。

「お、いた。太いな。……柔らかいうちから重いよ、これ」

「足を、どけろ。折り目が潰れる」

「もう遅いよ。中のが起きてきた」

足の裏が、竿を腹のほうへぐっと押した。

「ッ、ふ」

鼻から息が抜けた。

踏まれて、押されて、竿に血が入っていく。

粕谷のちんぽは起きても上へ反らない。

真っ直ぐ前へ出るから、スラックスの前を内側から突いて、織田の土踏まずを布ごと押し返した。

「うわ、押し返してきた。硬い。靴下で踏んでるだけなのに」

「……机に、座るな、ッ。客も、肘をつく、机だ」

「手。止まってる」

粕谷は歯を嚙んで、右手を動かした。

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

織田のちんぽを抜く音が速くなると、足の裏も同じ速さでスラックスを擦る。

ずり、ずり。

布の中で皮がめくれて、裸になった亀頭が下着の内側に擦れた。

「ん、」

「今の、どこから出たの。喉？ 鼻？」

「喉だ。……ッ、文句があるなら、足を洗ってから来い」

織田は足を止めもしなかった。

「はは、ッ。朝、風呂に入ったよ。あんたの膝、さっきから俺の脛に当たってる。震えて

んの」

織田の足の指がひらいて、親指と人差し指の股で、亀頭を布ごと挟んだ。

きゅ、と締められる。

「ぐ、ッ」

「丸いな、先っぽ。指で挟める。……あ、靴下、濡れた。あんたの汁、スラックスを抜けてきてる。多くない？」

「安い靴下を、ッ、履いてるからだ。水を、吸わねえ」

織田は声を出して笑った。

「はは、ッ。三足千円だよ、悪かったな」

笑いながら、今度は踵を使ってくる。

踵が股の下へ潜って、金玉を下からぐい、と持ち上げる。

「うゝ、」

「重い。踵に乗る。……くく、ッ、ずっしり。何を溜めてんの、ここに」

「足癖の、悪い、ッ、課長だな……ふ、ッ」

踵の上で、金玉がごろ、と転がされた。

「足だけじゃ足りないな。手も使う」

織田は左手を机から離して、粕谷の腰の後ろへ回した。

スラックスの上から、右の尻たぶを掴まれる。

指が食いこんで、粕谷の腰は半歩、前へ引き寄せられた。

「尻もでかい。硬いな。……スラックス、ぱんぱんだ」

「どこを、掴んでる。離せ、ッ、仕立てが伸びる」

「あんたの尻が勝ってるよ、布に。縫い目が悲鳴あげてる」

寄せられたぶん、足の裏が強く当たった。

土踏まずが竿を腹へ押しつけて、付け根から亀頭まで、ずり、ずり、と擦り上げる。

粕谷の手の中では、織田のちんぽが我慢汁でぬるぬるになっている。

くちゅ、ぬちゅ、くちゅ。

「今日の客さ」

織田は机の上で腰を揺すりながら続けた。

「見積を開く前に言うんだよ。『前の課長さんは端数を切ってくれた』って。あんた、どこでも切ってたの」

「逆だ、ッ。最初から、乗せとくんだ。……ふ、ッ、客に、引かせてやる分を」

「は、ッ。それ、俺は教わってないな」

織田の左手が、尻たぶをぎゅっと握り直した。

「聞かれなかった」

「『見て盗め』が口癖だったろ、あんた。……だから今、盗んでる。顔、こっちだって」

また顎が戻された。

織田は粕谷の顔を、下から覗きこんでいる。

額に汗が浮いているのも、鼻の穴が広がっているのも、全部見られている。

——腹が立つ。それなのに、腰が逃げない。

「耳、赤い。首まで赤いよ。あんた、足で踏まれるところなんだ」

「顔色は、ッ、口に出すな。腹で読め。……そう、教えた、ろうが」

「顔に書いてあるのを音読してるんだよ。……手。俺のが留守だ」

足の裏が、わざとゆっくり竿を撫で上げた。

「なら、足を、止めろ、ッ、ぐ」

「やだ。面白いもん。あんたの眉が、踏むたびに寄るんだ」

足の指がまた亀頭を挟んで、今度は左右にこね回した。

下着の中はもう我慢汁でぐしょぐしょで、こねられるたびに、ぬち、ぬち、と布の中から音がする。

灰色のスラックスの前に、黒い染みが丸く浮いていた。

その染みの真ん中を、織田の足の親指がぐり、と押す。

「ッ、ふ、……っ、く」

「ここだ。先っぽの割れ目。押すと、じわって出てくる。靴下がべとべと」

「言う、な、ッ、そういう、事を」

濡れた足の親指が、染みの上で円を描いた。

「見えてるんだから仕方ないだろ。……手。
また止まってる」

粕谷の右手は、もう織田のちんぽを握っているだけになっていた。

「あ、腰が来た。自分で擦ってる。俺の足の裏に、ちんぽ、ぐいぐい押しつけて」

「……くそ、ッ、その、靴下が、ッ、ふ、ん、」

「靴下に当たるなよ。ふは、ッ。ほら、もっと腰。尻、俺の手に預けて」

尻たぶを掴んだ左手が、粕谷の腰を足の裏へ、ぐい、ぐい、と引いた。

「ぐ、ッ、……引くな、ッ、布が、亀頭に、食いこむ」

「わざとだよ。くびれの所、指の股に嵌まってる。……太いな、ほんとに」

織田は笑いながら、土踏まずを速く上下させた。

ずり、ずり、ずり、ずり。

踵が金玉を押し上げて、指の股が亀頭を絞る。

腿の内側が攣りそうになって、粕谷の膝がかくん、と折れかけた。

「待て、足、ッ、止めろ、出る、だろうが、」

「いいよ、そのまま。靴下の足に踏まれて」

「スラックスの、中だぞ、ッ、ぐ、……ん、」

織田は笑って、粕谷の尻を自分のほうへ引きつけた。

「だからいいんだろ。その中に、全部」

亀頭を、足の裏が腹へ押しつぶした。

「うゝ、ッ」

びゅく、と下着の中で跳ねた。

びゅく、びゅる、びゅく。

熱いザーメンが下着の中に広がって、行き場がなくて、竿と布の間を這い回る。

左の腿を伝って、垂れた金玉を濡らして、膝の裏まで下りていく。

「うゝ、……ッ、ふ、ッ、ぐ」

「うわ、跳ねてる。足の裏で分かる。……あははッ、はははッ！」

織田が机の上でのけ反って、声を出して笑った。

「まだ出てる。長いな。染み、すごいよ。腿まで色が変わってる」

粕谷のスラックスの前は、掌を広げたより大きく、黒く濡れていた。

三日ぶんの、濃い匂いが上がってくる。

膝が震えて、粕谷は織田のちんぽを握ったまま、左手を机の縁についた。

「……三日、抜いてねえんだ」

「は？」

「降りてから帰りが遅えんだよ、そんな暇があるか。それに歳だ。この歳で溜めると、締まりが利かなくなる。だいたい、織田課長の靴下が悪い。化繊だろ、それ。ざらついて擦れるんだ。綿ならこうはなってねえ。それと今日は昼を食ってない。樋口に渡す引き継ぎ

を書いてたら食いそびれた。腹に何も入っていないと踏ん張りが利かねえんだよ、男は。ふだんなら足ごときで、ッ、こんな量が出るか」

織田は机の上で体を折って、目尻を指で拭った。

「はは、ッ、腹、痛い。靴下のせいで出した人、初めて見た」

濡れた足の裏を持ち上げて、自分の鼻へ近づける。

「くさ。濃いな。三日ぶんって匂いだ。……ほら、返す」

足の裏が、粕谷の腿の乾いた所で、ぐい、ぐいと拭われた。

「腿で、ッ、足を拭くな。裾の内側まで染みる」

「どうせクリーニングだろ。染みが一つ増えても同じだよ。……で、俺のは。まだなんだけど」

織田のちんぽは粕谷の右手の中で、反ったまま、ぴくぴくと待っている。

「……てめえで扱け」

「やだよ。あんたの手がいいって言ってるだろ。左、空いてるよな。両手使って。左は玉。下から持って」

粕谷は机についていた左手を、織田の股へ入れた。

織田の金玉は締まって、付け根のすぐ下にながっている。

粕谷の太い指なら、片手で二つとも包めてしまう。

「……っ、は。あったかい。そのまま、転がして。握るなよ、あんたの握力だと潰れる」

「卵よりは丁寧に持ってやってる」

「はは、ッ。怖いこと言う。……でも指は優しいんだよな、あんた。客にもそうだった」

右手で竿を扱いて、左手で玉を揉む。

くちゅ、ぬちゅ、くちゅ。

皮の厚い両手が、元部下の股の間で、唾と我慢汁にまみれて動いている。

その間も、織田の足はどかなかった。

濡れた靴下の裏が、出したばかりで生温かいスラックスの前を、また踏む。

ぐちゅ。

「ぐ、ッ、踏むな、今は、ッ、んぐ、」

「中、ぐちゃぐちゃだ。音するよ。聞こえる？」

ぐちゅ、ぐちゅ、ぬちゅ。

自分のザーメンの中で、縮みかけたちんぽがこね回される。

出したばかりの亀頭は、布が擦れるだけで腰が抜けそうになる。

「ッ、ふ、う、……染みに、なる、ッ、だろうが、ウールだぞ」

「手遅れだよ。裾まで色が変わってる。手、速く。……そう、それ。付け根から、ぎゅって」

織田の足の指が、濡れた布ごと亀頭をつまんで、くい、と引っぱった。

「ん、ッ、……っ、く、そこを、つまむな、出した、後だぞ」

「なのに、また芯が入ってきてる。元気だな、溜めてた人は」

粕谷は腹立ちまぎれに、手首を使って扱き上げた。

ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ。

織田の腹が、シャツの下で固く締まる。

息が浅くなった。

「は、ッ、……っ、は。親指、亀頭の裏。……そこ。あんた、ほんとに、手は、いいな」

「褒めて、ねえで、ッ、さっさと、終われ」

「もうすぐ。それまで、目、こっちに置いとけ。逸らしたら最初からな」

粕谷は織田の顔を睨んだ。

客の前では崩れない顔が、眉を寄せて、口を半分あけている。

「掌。上からかぶせて。机、汚すなよ。……あ、ッ、出る」

粕谷は左手を玉から離して、亀頭の上に掌を伏せた。

その掌の真ん中を、熱いのが打った。

びゅ、びゅる。

びゅく、びゅく。

「……っ、く、は」

織田の腰が机の上で跳ねて、足の裏が粕谷の前をぎゅう、と踏みしめる。

掌の窪みにザーメンが溜まって、指の間からあふれて、手首を伝った。

濃くて、重い。

粕谷のより、鼻に刺さる匂いがする。

「こぼすなよ。……ふ、ッ、まだ出る。握ってて。最後まで搾って」

粕谷は右手で、付け根から亀頭へ、ゆっくり一度だけ絞り上げた。

とろ、と残りが掌に足された。

織田は長く息を吐いて、足をやっと下ろした。

「……は一。出た出た」

「出しすぎだ。袖に入った。カフスの中までだぞ」

「あんたほどじゃないよ。腿まで濡らした人に言われたくない」

織田は机から下りて、自分のちんぽを下着へしまった。

ファスナーを上げる音がする。

粕谷は、両手を腹の前に浮かせたまま立っていた。

右手は唾と我慢汁で、左手はザーメンで、どこにも触れない。

「拭けよ。ハンカチ、持ってるだろ。上着の胸のポケット。あんた、いつもそこだ」

「……よく見てるな」

「四年ね。あんたが客の前で汗を拭くの、いつも左手だった」

粕谷はましなほうの右手の小指で、胸ポケットから白いハンカチを引っ張り出した。

左の掌を拭う。

指の股、手首、カフスの内側。

白い布が、ぐっしょりと重くなった。

「畳んで。戻して。同じポケット」

「濡れたのを、胸に入れろってのか」

「あんたのだろ、それ。持って帰れよ。中身は俺のだけど」

粕谷は濡れた面を内側にして畳み、胸ポケットへ押しこんだ。

シャツの上から、左の胸が冷たくなる。

織田は脱いだ革靴に足を入れて、顔をしかめた。

「うわ、靴の中まで冷たい。あんたのせいだからな、これ」

鍵が開いた。

「見積、続きやっというて。帰るときは内線な」

織田は机の紙を伏せたまま置いて、先に出ていった。

粕谷は上着の前を合わせて、下まで全部ボタンを留めた。

それでも、腿の染みは裾から覗く。

下着の中でザーメンが冷えて、歩くたびに金玉が腿に貼りついた。

面談室を出た所で、ラジオの音がした。

ナイター競馬の実況だ。

「あれ、粕谷課長。まだいたの。遅くまでご苦労さん」

守衛の丸山が、鍵束を腰で鳴らしながら立っていた。

粕谷より頭一つ半低い所から、痩せた顔が見上げてくる。

「丸山さん。見積が残ってましてね」

「月曜から残業かい。偉いねえ。俺はあと二レースで上がりだ」

丸山はラジオの音を少し下げた。

「……何かこぼした？」

丸山は鼻をひくつかせて、面談室の中を覗いた。

「漂白剤みたいな匂いするね。換気扇、回しとくよ」

「……蛍光灯も一本、切れかけてますよ。安西さんが明日替えるそうです」

「ああ、脚立ね。地下だって、さっきも言ったのに」

丸山は壁のスイッチを押して、粕谷の上着の裾のあたりを一度だけ見た。

それから何も言わずに、ラジオと一緒に廊下を曲がっていった。

十時。

粕谷は自分の席で、見積の最後の行を打ち終えた。

スラックスの前は乾いて、板のように固く突っ張っている。

胸のハンカチは、まだ湿っていた。

帰るには、内線を入れなければならない。

粕谷は受話器を取った。

課長席は十歩先で、パーティションの上に
織田の頭が見えている。

「……織田課長。上がるぞ」

受話器の中と、十歩先から、同じ声が二重
に聞こえた。

「おつかれ、粕谷さん。課長、は付けなくて
いいよ。二人のときは」

「……」

「明日、ハンカチは替えてこいよ」

粕谷は受話器を置いた。

置いた、というより叩きつけた。

がちゃん。

音がフロアに響いて、パーティションの向こうで、織田が声を出して笑った。

第2話 評定の欄

「粕谷さん、これ当たると思います？」

水曜、夜の八時。

向かいの席から樋口が身を乗り出して、スマートフォンを粕谷の机の上へ突き出してきた。

ライブの抽選の申し込み画面だ。

「彼女に言われたんすよ。外れたら俺のせいになるんで。今日も見積の差し戻しを食らって、定時に出そこねたし」

「日頃の行いだな。お前、人の机の菓子を黙って食うだろ」

「あ、これ貰います」

樋口は粕谷の机の煎餅を一枚取って、鞆を肩に掛けた。

「お先です」

ぱり、という音がエレベーターのほうへ遠ざかっていく。

フロアに残ったのは、粕谷と、窓際の課長席の織田だけになった。

粕谷は顔を上げずに、見積の続きを打った。

革靴の音が近づいてきて、椅子の後ろで止まる。

背もたれに掛けた上着が、持ち上げられた。

「替えてきた？ ……紺か。月曜の白いのは」

織田が上着の胸ポケットを指でひらいて、
中を覗いている。

「スラックスと一緒にクリーニングだ。受付
の婆さんに、何の染みですかと聞かれた」

「何て答えたの」

「ヨーグルトだ」

織田が上着を背もたれへ落として、嘔き出
した。

「はは、ッ。三日ぶんのヨーグルト」

笑いながら、紙を一枚、粕谷のキーボード
の上に置いた。

「期中評価。本人に見せて話せてさ、人事
が」

粕谷の名前の下に、欄が五つ並んでいる。

協調性の欄は、Bだった。

織田は胸のペンを抜いて、粕谷の目の前で、BをCに書き直した。

「理由。報告の遅れ。火曜の日報、出たのが今朝だ」

「客先から直帰だ。朝いちで出すと、先に言っている」

「うん、聞いた。でも遅れは遅れ」

ペンの先は、まだ紙の上にある。

「上げたいなら、俺の機嫌を取れよ。あんた、客の機嫌は取れるだろ」

このCが人事へ上がれば、客先を持たせてもらえなくなる。

粕谷は椅子を回して、織田を見上げた。

「……織田課長」

「課長は付けなくていいって」

「なら、お前だ。お前な、評価の紙を私用で書き換えて、寝つきが悪くならねえのか」

織田は目を丸くして、それから肩を揺らした。

「はは、ッ。『お前』。昇格して二週間で、そこまで落ちたよ、俺」

織田は機嫌のいい顔で、椅子の背を掴んだ。

「夜はぐっすりだよ。……どけよ。今日は俺がここ」

粕谷が立つと、織田は入れ替わりに粕谷の椅子へ座った。

粕谷の椅子に沈むと、織田の爪先は床に届かない。

「高いな、あんたの椅子。足が浮く」

ぷしゅ、とレバーが引かれて、座面が沈んだ。

「下。机の下、入って。膝ついて」

「……俺の肩が通る幅か、これが」

「斜めにすれば入るって。ほら」

粕谷は机の縁に手をかけて、膝を折った。

ごん。

頭が天板の裏に当たった。

「ッ、……くそ」

「くく、ッ、いい音。でかいんだから、首すくめろよ」

机の下は暗くて、埃とカーペットの匂いがする。

肩が左右の板につかえて、背中を丸めないと収まらない。

目の前に、織田の膝がある。

「ファスナーだけ下ろして。あんたの、出し
といて。脱がなくていい」

「……出して、どうする。風邪をひかせる気
か」

「机の下で仕舞ってたら、俺の靴が暇だろ」

粕谷はスラックスのファスナーを下ろして、
下着の前からちんぽを引き出した。

まだ柔らかい。

皮を半分かぶったまま、重たく下を向いて
いる。

「お、やっと顔を出した。……太いね。寝ても、俺の手首くらいある」

「見たら仕舞うぞ。カーペットの埃が付く」

「まだ何もしてないだろ。これからだよ」

頭の上で、引き出しの開く音がした。

「あ、輪ゴム。箱ごとあるじゃん」

「おい、人の引き出しを」

「いいのがあった。……皮、かぶってるな。自分で剥いて。的が隠れてる」

織田は箱の中を、がさがさと探っている。

「輪ゴムで、何を束ねる気だ」

「いいから。指で、付け根のほうへ引いて」

粕谷は親指と人差し指で、自分の皮を後ろへ引いた。

ぬる、とめくれて、丸い亀頭が机の下の暗がりに出る。

「でかい先っぽ。色、濃いな。そのまま持ってて。動くなよ」

ぱちっ。

「痛ッ」

右の腿の内側に、細い痛みが走った。

「外した。動いたろ、今」

織田は椅子を少し後ろへ引いて、背を丸めて机の下を覗きこんでいる。

人差し指に輪ゴムを掛けて、親指で引いて、片目をつぶった。

ぱちん。

「ぐ、ッ」

今度は竿の真ん中、皮を引いている指のすぐ先だ。

手の中で、ちんぽがぶるん、と揺れた。

「当たった。揺れた揺れた。重いから、揺れ方が遅い」

「ガキの遊びだ。……備品だぞ、それは」

「あんたの引き出しのдар。あんたに返してるんだよ」

ぱちっ。

「ん、」

シャツの上から、左の乳首を打たれた。

布ごしでも、針で刺されたように痛い。

「お、乳首。今、肩が跳ねた。……もう一つ、右」

ぱちっ。

「ッ、ふ、……狙いが、下手だ。腿だの、脇だの」

「今のは乳首の真横。寄せてるんだよ、わざと」

ぱちっ。

「ぐ、ッ」

右の乳首の真上だった。

じん、と痺れて、そのあとから熱くなる。

「立った。シャツの上から分かる。豆みたいだ。でかい的だな、あんたの乳首」

「弾いて、遊べてえなら、ッ、祭りに行け」

「夜店の的は、当てても起き上がってこないからね。……下、でかくなってきた」

粕谷は自分の股を見た。

輪ゴムを当てられるたびに血が入って、ちんぽが起きている。

太った竿が、机の下から織田の膝のほうへ伸びていく。

皮を引いている指を、亀頭の張りが内側から押し返してくる。

「ふは、的がでかくなった。輪ゴムで硬くなる人、いるんだ」

「……輪ゴムが、もったいねえ。総務に、何て言って貰う気だ」

「書類が増えた、でいいだろ。先っぽ、もう濡れてる。糸、引いてるよ。カーペットまで。手、どけて。亀頭に当てる」

粕谷の指が離れても、皮はもう戻らなかった。

「待て、そこは、」

織田は輪ゴムを引いて、よく狙った。

ぱちっ。

「うゝ、ッ、……っ、く」

むき出しの亀頭の、くびれのすぐ上だった。

腰が跳ねて、頭がまた天板に当たる。

ごん。

「真ん中。赤い点がついた。……汁が飛んだよ、今。俺の靴まで」

「うゝ、ッ、……亀頭は、やめろ、ッ、皮のねえ所だぞ」

「だから狙うんだろ。跳ねたとき、いちばんいい顔した」

外れた輪ゴムが、粕谷の膝のまわりに散らばっている。

椅子の車輪が鳴って、織田の膝が粕谷の肩の両脇まで戻ってきた。

織田は指に残った一本を手首に掛けて、自分のファスナーを下ろした。

じ、という音が、粕谷の鼻の先でした。

反ったちんぽが出てきて、亀頭が粕谷の唇の前で止まる。

「口。開けて」

「……歯が当たっても、文句を言うなよ。やった事がねえんだ」

「一回も？」

織田の笑いが、口の途中で止まった。

「あるわけねえだろ」

「……そっか。じゃあ教える。四年ぶんの礼だ。舌、出して。亀頭の裏から」

粕谷は舌を出して、亀頭の裏に当てた。

しょっぱい。

汗と、小便の残りの味がする。

「そう。そのまま、ぐるっと。……は、ッ。ひげが玉に刺さる。いいよ、口に入れて」

唇をひらいて、亀頭をくわえた。

張り出したくびれが、歯の内側をこすって入ってくる。

顎が外れそうなくらい、口がいっぱいになった。

「んゝ、ぐ」

「歯、当たってる。唇で包んで。……そう。上手い上手い。目、上。啜えたまま、こっち見ろ」

粕谷は眉を寄せて、上目で織田を睨んだ。

「その顔。口はちんぽでいっぱいなのに、目だけは、客先で俺を叱った時のまんまだ。……いいよ。逸らすなよ」

織田の両手が、粕谷の後頭部に回った。

短い髪を掴まれて、ぐい、と引き寄せられる。

ぬふ。

反った竿が上顎をこすって、亀頭が喉の手前まで来た。

「ご、ッ、……んゝ、んゝ」

「吐くなよ。鼻で息して。右手は自分の。扱いてろ。左手は俺の腿」

粕谷は左手を織田の腿に置いて、右手で自分のちんぽを握った。

我慢汁で、付け根までぬるぬるしている。

くちゅ。

「んゝ、……ッ、ふ」

「あ、今、喉が動いた。自分のを握ると締まるんだ。……続けて」

織田の両手が、粕谷の頭を前後に動かす。

ぬぷ、ぬぷ、ぐぼ。

唇の端から涎があふれて、顎を伝って、扱いている自分の手の甲に落ちた。

ぐぼ、ぬぷ、ぐぼ。

「今日さ、課長会議が二時間だよ。部長がプロジェクターを繋ぐだけで二十分。俺、その間ずっと立って線を持ってた」

ぐぼ、と喉が鳴る上で、ペンを回す音がしている。

「誰も俺の顔なんか見てない。壁の画面を見てる。あんたもだよ。昨日も今日も、一回もこっちを見なかったろ」

「ん、ぐ、んッ」

「返事是要らない。口は使ってろ。……鼻、俺の毛に付けろ」

両手が頭を押さえつけた。

ぐぼ。

亀頭が喉の奥に嵌まって、粕谷の鼻が織田の毛に埋まる。

「ご、ッ、……ん` ん` 、ッ」

息が止まる。

涙がにじんで、喉がひくひく締まった。

「……っ、は。締まる。奥、あったかい。あんたの喉、太いから全部入る」

頭を引かれて、粕谷は鼻から息を吸った。

涎が糸になって、亀頭と唇の間に垂れる。

また押しこまれる。

ぐぼ、ぐぼ、ごちゅ。

粕谷の右手は、頭を振られる速さに合わせて速くなっていた。

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

「手、離すぞ。抜くなよ。自分で奥まで咥えてろ」

後頭部から手が消えた。

織田は手首の輪ゴムを指に掛け直して、机の下へ腕を伸ばした。

背を丸めて、粕谷の肩の横から、胸のほうへ指を向ける。

ぱちっ。

「んッ」

左の乳首だ。

打たれた瞬間に、喉がぎゅっと締まった。

「当たった。喉、締まったな。……これ、いいな。輪ゴムを当てると、あんたの口が吸いついてくる」

ぱちっ。

「ん、ぐ、ッ」

今度は扱っている手の上から、亀頭の横。

痛いのに、手の中のちんぽがびくん、と太くなる。

「あんた、痛いと硬くなるんだ。へえ。……
今ので汁が垂れた。咥えたまま、鼻で唸って」

粕谷は咥えたまま、織田を下から睨んだ。

その時、エレベーターの着く音がした。

ちん。

織田は椅子ごと前へ出て、机の奥まで膝を入れた。

粕谷の頭は、織田の腹と天板の間に挟まれる。

亀頭が喉の奥に嵌まったまま、抜けなくなった。

「ん` ……ッ」

「静かに」

足音が、通路を近づいてくる。

「あれ、課長。まだいたんすか」

樋口の声だ。

「……そこ、粕谷さんの席ですよね」

「借りてる。粕谷さんはトイレ。どうした、忘れ物か」

織田の両手は天板の上で、ペンを回している。

「充電器、忘れました。その白いやつす。タップに挿さってるの」

粕谷の左の耳に、何かが触れた。

天板の奥の隙間から垂れている、白いコードの先だ。

それが、ずる、と上へ引かれて、耳の縁をこすっていく。

「ッ……」

喉が締まって、織田の腿がぴくりと動いた。

「ほら、これ。……ライブ、申し込めたのか」

「いけました。取れたら有休下さいね。平日なんで」

「取らぬ狸だな。当たってから言え」

樋口はコードを手に巻きながら、まだ立っている。

「あと課長、粕谷さんに言っと言って下さい。引き継ぎの三枚目、字が小さくて読めないっ

て」

机の下で、粕谷の喉が低く鳴った。

「ん」

「……何か鳴りました？」

「俺の腹。晩飯がまだなんだ」

織田の革靴の先が、机の下で動いた。

膝をついた粕谷の股へ入ってきて、スラックスの上から金玉をとん、と持ち上げる。

握ったままの右手の中で、ちんぽが跳ねた。

我慢汁が、カーペットへ糸を引いて落ちる。

口では息ができない。

鼻の穴を広げて、織田の毛の匂いごと空気を吸う。

「この煎餅、貰っていいっすかね。粕谷さんのですけど」

「本人に聞けよ」

「いないんで」

ぱり。

「粕谷さん、長いっすね。電話でも持って入ったんすかね」

「さあ。客からだろ。あの人、便所でも客には出るから」

革靴の先が、金玉の下をぐり、とこねた。

粕谷の鼻から、ふ、ッ、と息が漏れる。

「じゃ、お先です。課長も早く帰ったほうが
いいですよ。腹、すごい音してました」

足音が遠ざかる。

エレベーターの扉が閉まる音がした。

織田は椅子を後ろへ引いて、机の下を覗き
こんだ。

「ふは、ッ、……あなた、今、喉で怒った
ろ。『字が小さい』で」

「んゝ、ぐ、んゝんゝッ」

「何言ってるか分かんない。……あなたの金
玉、樋口がいる間じゅう、俺の靴の上で上が
ったり下りたりしてたよ。『字が小さい』のと
こが、いちばん跳ねた。あなた、腹が立つと
硬くなるのか」

粕谷は咥えたまま、織田の腿に爪を立てた。

「ん`ッ、ん`ん`」

「痛い痛い。怒るなって。手、動かしていいよ。咥えたまま、出せ。目はこっち」

粕谷の右手が動いた。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ。

涎と我慢汁でぐしょ濡れの竿を、太い指が付け根から亀頭まで扱き上げる。

口の中では、織田のちんぽが舌の上で脈を打っている。

——くそ。出る。

「ん`、ぐ、……う`、ッ」

びゅる、と手の中から飛んだ。

びゆく、びゆる、びゆく。

膝の前のカーペットに、白いのがぼた、ぼたと落ちていく。

腰が前へ出て、咥えたままの喉が、織田の亀頭を何度も絞った。

「……っ、は、すご。喉がうねってる。出しながら吸ってるよ、あんた」

織田は背を丸めて、床を見た。

革靴の先で、カーペットの上を指す。

「はは、はははッ。飛んだなあ。ここ。ここも。俺の靴の横まで来てる。量が多いんだよ、あんたは。金玉がでかいだけある」

「んゝーッ、んゝ」

「分かった分かった。次は俺の番」

両手が、粕谷の頭を掴み直した。

今度は加減がなかった。

ごちゅ、ごちゅ、ごちゅ。

喉の奥を、亀頭が続けざまに叩く。

「ご、ッ、ん、ご、ぶ、ッ」

鼻水と涎が一緒に垂れて、粕谷のシャツの胸に染みていく。

出したばかりのちんぽが、ファスナーの間でぶらぶら揺れて、織田の靴に当たった。

「は、ッ、……っ、は。あんたの口、でかくて、いい。喉、ひらいとけ。こぼすなよ、俺の椅子じゃないけど」

ごちゅ、ごちゅ、ぐぽ。

「飲め、ッ、……は、全部」

頭を腹に押しつけられた。

喉の奥で、ちんぽが膨らんだ。

びゅ、びゅる。

熱いのが、喉に直に流しこまれる。

「んゝ、ぐ、……ご、く、ッ」

飲まないと息ができない。

ごく。

ごく、ごく。

「は、……そう。飲んでる。喉、動いてる。
もう一口。まだ出てる」

織田は最後に腰を二度ゆすって、ゆっくり
抜いた。

ぬぽ。

「げほ、ッ、……ぶ、は、ッ」

「まだ。先っぽに残ってる。舌で取って」

亀頭の割れ目に、白い玉が一つ乗っている。

粕谷は咳を呑みこんで、舌の先でそれをすくった。

苦くて、喉に貼りつく。

「……濃いのを、ッ、出しやがる。水で割れ」

「原液で飲め。口。開けて。舌、見せて」

粕谷は咳きこみながら、口を開けて舌を出した。

織田が親指で下の唇を押さえて、中を覗く。

「残ってない。……えらいえらい。初めてにしちゃ、上出来だ」

「げほ、ッ、……このカーペットはな、毛が硬えんだ」

粕谷は机の下で、唇を手の甲で拭った。

「膝に刺さる。総務が安いのを入れるからだ。それとこの椅子。お前、勝手に下げたろ。下げると肘掛けが天板に当たって、俺の頭の逃げ場がねえんだよ。二回も打った。樋口もだ。充電器を人の島のタップに挿しっぱなしにして、コードを俺の耳に垂らしやがって。字が小さいだと。あれは読む気がねえんだ。先月までなら、俺の字が蟻みたいでも、目を細めて最後まで読んできたぞ、あいつは。あと輪ゴムだ。あれは去年の箱だ。古いのは伸びが悪くて、当たりが重い。弾くなら新しいのを開けろ。総務の棚に幾らでもある」

「はは、ッ、ははは。新しい箱ならいいんだ」

織田は椅子の上で、腹を押さえて笑った。

「……口が滑った。顎がだるいからだ」

「誰のせいだろうな。……で、床。それ、あんたのだろ。拭いて」

机の上から、ティッシュの箱が下ろされた。

粕谷は机の下から這い出して、カーペットに両手と両膝をついた。

ファスナーからちんぽを垂らしたまま、自分のザーメンにティッシュを当てる。

毛の間に入りこんで、押さえても取れない。

「取れねえ。……硬い毛のくせに、吸いこむのは早い」

「擦るなよ、広がるから。上から叩くんだ。
唾で湿らせて」

粕谷は丸めたティッシュを睨んだ。

「染み抜きまで、お前に習うのか、俺は」

「一人暮らしが長いんだよ。染みなら俺のほう
が上手い」

革靴の先が、後ろから尻をつついた。

とん。

「ッ、靴か」

「尻が通路にはみ出てる。でかいから。……
もっと右。まだ白いのがある」

とん、とん。

四つん這いの尻を、靴の先が右へ左へ押
す。

「蹴るな。革靴の先は、固えんだ」

「靴で教えてやってんだ。そこ。輪ゴムも拾って。全部」

粕谷は唾とザーメンで濡れたティッシュを丸めて、散らばった輪ゴムを一本ずつ拾った。

机の下、椅子の脚の間、樋口の席の手前。

尻を上げて這い回る後ろで、織田がずっと笑っている。

「そこ、椅子の車輪の裏にも一本。……あんたさ、這ってても背中が広いな。机の下、よく入ったよ」

「押しこんだのは、お前だ。次は、てめえの机でやれ」

「あっちは窓際だよ。あんたの尻、通りから丸見えになるけど」

拾った輪ゴムを箱に戻すと、織田はペンを取った。

評価の紙のCに線を引いて、横にBと書き直す。

「遅れは無かったことにしとく。……口のほうは、Aを付けてやりたいけどな。欄が無い」

紙を粕谷のキーボードの上に置いて、織田はファスナーを上げた。

「椅子、返すよ。あったまってる」

革靴の音が、課長席へ戻っていった。

粕谷は膝のカーペットの毛を払って、ちんぽをしまった。

顎の付け根が、口を閉じるだけでだるい。

亀頭の赤い点に下着が擦れて、ひり、とした。

翌朝、木曜の八時二十分。

粕谷は席に着いて、すぐに腰を浮かせた。

椅子が低い。

織田の高さのままだ。

粕谷はレバーを引いて、座面を元へ戻した。

足元のカーペットに、輪ゴムが一本落ちている。

拾い残した。

「おはようございます」

樋口が出勤してきて、粕谷の指先を見た。

「粕谷さん、それ、要らないなら下さい。弁当の蓋が浮くんで」

粕谷は輪ゴムを指に掛けたまま、渡さなかった。

課長席で、織田が受話器を耳に当てたまま、こっちを見ている。

空いた手の指を二本立てて、輪ゴムを飛ばす真似をした。

粕谷は輪ゴムを自分の引き出しに放りこんだ。

閉めた引き出しの中で、箱の輪ゴムがざらり、と鳴った。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 降格課長、元部下の課長に人事の紙
で押さえられ、机の下で啜えさせられ面談室
でナカに出される

サークル タビューヘ

発行日 2026・10・8

レーティング R18